

賀川 浩さん(95)

# ラストメッセージ

「生きて帰ってきて、世界中に仲間ができた」

ひょうご 戦後75年



賀川浩さんの蔵書を集めた「神戸賀川サッカー文庫」で  
＝神戸市立中央図書館内(撮影・鈴木雅之)

一面から続く

サッカー・ジャナリストの賀川浩さんは1944年、徴兵を持たず、陸軍の特別操縦員士官を志す。朝鮮に行けばアルコル燃料願する。すでに戦況は悪化の一途をたどっていた。

徴兵検査を受けて申種合格や

つたけど、先に受けた特別操縦員士官の試験に通ったんや。目も耳もええし、サッカーやって運動神経も発達してる。どうせ戦争に行くんやったら飛行機乗りになるんやと思ってたから」

兄は日本代表にも選ばれた名選手。賀川さんも頑健なプレーヤーだったのだそう。小柄な体と不釣り合いなほど肩幅が広い。「宇都宮の陸軍飛行学校で訓練

をしながら、レイテ沖海戦や南方の戦争が激しくなつて、どん

どんガソリンがそつちに取りられず、教育訓練も中断されるわけだ。朝鮮に行けばアルコル燃料願する。すでに戦況は悪化の一途をたどっていた。

「徴兵検査を受けて申種合格や

つたけど、先に受けた特別操縦員士官の試験に通ったんや。目も耳もええし、サッカーやって運動神経も発達してる。どうせ戦争に行くんやったら飛行機乗りになるんやと思ってたから」

兄は日本代表にも選ばれた名選手。賀川さんも頑健なプレーヤーだったのだそう。小柄な体と不釣り合いなほど肩幅が広い。「宇都宮の陸軍飛行学校で訓練



特攻隊員だった賀川さん

「僕は沖繩戦に合つかうかと思つたけれど、そうはならんか。本土決戦用ですわ。5月に入つて隊長から「第413飛行隊付を命ず」と。そして「今年のスイカは食べないです。」「今年のスイカは食べないからな。その言葉をずっと覚えていて、サッカーワールドカップの取材で世界に行くたびにスイカを食べることが一つのテーマになりました。特に好きではなかった。」「宇都宮の陸軍飛行学校で訓練

「技術を習得するには打ち込まなあかんでしよ。それはサッカーでも一緒。とにかく怖さより、そ家が焼け、京都の親戚の家に疎開してるといふのは手紙で知っていた。日本が空襲で散々やられてるのに、こっちは…。そらいらい

聞き手・山本哲志

「とにかく好きなことを一生懸命やります。何があろうとやってみる。うまくいかなかったらそれをやれるのが幸福なことですよ。私なんか生きて帰つてきて、世界中に仲間ができた。ちよつと運が良さすぎるかもしれません」

復員後、新聞社のスポーツ記者となった。思い出深い取材の一つに64年東京五輪の閉会式がある。東西冷戦下、各国の選手が腕や肩を組み、入り乱れて入場する姿に「平和の祭典」を見た。

新型コロナウイルスで世界が変容を迫られている。スポーツも例外ではない。大正生まれの戦中派は何を思うのか。

かがわ・ひろし 1924年、現在の神戸市中央区出身。神戸一中(現神戸高)などでサッカー選手として活躍し、戦後は新聞記者に。サンケイスポーツ大阪編集局長などを経てフリー。日本サッカー殿堂入り。2015年、国際サッカー連盟(FIFA)会長賞を日本人として初めて受賞した。

2020. 8. 18. 神戸新聞分

救われた命. 自分の人生の中で どう生かすかは. その人の感じ方によると思ひ.  
様々な結果の教だけ 実は感謝もある.  
批判は一見正当の意見に聞こえるが. それは心があつてこそではないだらうか